

第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

報告書資料 一般-44

学校名・団体名	各務原市特別支援教育推進部会
HPアドレス	なし
コース	教育研究
活動・研究 テーマ	LD（書字困難）の学校・保護者・医師3者連携 支援
〈活動・研究の意義、目的〉 適正な支援が社会的に立ち遅れているLD（書字困難）児童に対し、医療・教育の専門家と保護者がパートナーシップをもって支援を継続し、LD（書字困難）児童が在籍学級に包みこまれて学級適応する姿を生む手立てや制度を確立することは、インクルージョンの理念に叶い、ユニバーサル教育の推進も生み出す意義深いものである。 特別支援教育全国展開10年目を節目に、更に10年先を見通した先進的な実践研究を行って政策形成につなげることを目的とした。	

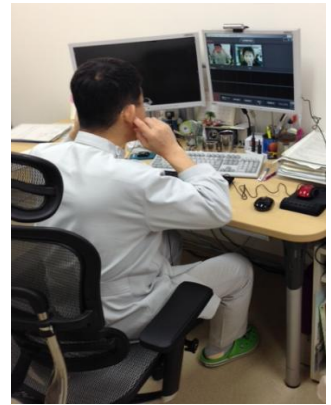
【活動内容】

- 8月・各務原市小中校長会・医師会に実践研究のアナウンスを行い、協力を願った。
・各務原市教育支援委員にあがったLD(書字困難)児童の中から保護者協力が得られる抽出児童の検討を行った
- 9月・KABC-II検査用具を購入し、検査実施のための研修会を行った。
・本会の代表が東京でKABC-IIアドバンスト研修を受け、中級程度の検査能力を身に付けた。
・抽出児童に市内の発達障害が治療できる医師を紹介し、受診した医師に本実践研究の協力を仰いだ。
・発達障害の診断および投薬が出来る医師が、LD(書字困難)の疑いのある在籍学校の校長に宛ててKABC-II検査を依頼する手紙を出し、保護者同意をとって検査を実施した。検査依頼が、学校長から市教委に入り、指導主事が学校に出向いて実施した。フードバックの機会は、検査児童在籍学校の特別支援コーディネーターが懇談会を設定し、出席した保護者と担任に検査者が行った。
・KABC-IIのプロフィールと医師の検査要請コメントと担任の授業での書き困難の子どもの姿を合わせて話すことによって教育的ニーズが明確となり、学校・保護者・医師が共通認識をもつことができるようになった。
・「基本情報・検査情報・問診表を関連づけた総合シート」と「在籍学級の書くことに対する作品や記録」と「KABC-II・WISC-IVの客観データ」の書式を整え、医師が診断の参考にできるようにした。
・LDの診断が出された場合は、児童の在籍学校で担任が保護者とともに個別の教育支援計画の策定と個別指導計画の作成を行って、在籍学級での支援をはじめた。診断が出なかった場合は、医師が「報告書」を作成して受診が必要であったり、今後も学級で留意して指導する必要があったりする内容を学校長に送り、学校が教育相談をするにあたって参考になるようにした。
- 10月・保護者に対して医師が受診時に「学校と医師の情報交換の同意書」をとり、TV電話やメールを使った日常的な学校・保護者・医師の3者連携支援を開始した。

10月~1月 ①~④を並行実践研究していった。

【① 学校・家庭・医療で連携支援の環境設定】

- ・クリニックに医師専用TV電話セット(PC・Webカメラ・スピーカー・マイク)と通級教室にも同様のTV電話セットを設置し、適宜、TV電話やメール等で学校と医師が情報交換して学校での様子を確かめたり、薬の使用の有無や医師のアドバイスが日常的にできるようにしたりして学校・家庭・医療で連携支援を行う環境を整えた。
- ・医師・大学教授・主事・会代表で特別支援教育巡回相談を行った。ケース会議を行って、行動療法の方針を立てた。以後、医師と学校がTV電話や普通電話・メール等で日常連携支援を行った。



【医師とのTV電話相談】

【② TV電話でLD指導法研修と教育相談】

- ・TV電話で山形大学三浦研究室と市立図書館を結び、三浦教授より本会会員が「KABC-IIプロフィール読み取り」と「LDに特化した指導」の指導を受けた。
- ・対象児の担任が、TV電話相談システムが設置してある市内小学校に出向き、「学級でのLD指導法の具体」について三浦教授と教育相談を行った。

【③ 小学校巡回教育相談】

- ・対象児の小学校に大学教授が出向く巡回相談を実施し、「KABC-IIプロフィール読み取り」と「LDに特化した指導法と学校・家庭・医療で連携指導」について名古屋女子大学宮脇名誉教授から指導を受けた。その他の困り感のある児童や担任についても宮脇教授より年間を通して指導を受けた。

【④専門研修講座】

- ・LDに伴う「感覚統合と発達協調運動障害講座」を名古屋女子大学宮脇名誉教授に、「医学的立場から見た(脳科学含む)発達障害講座」を岩田キッズクリニック岩田医師に講義をしてもらった。参加人数はのべ120人であった。

2月 まとめの講座

名古屋女子大学宮脇名誉教授が小中学校の教育相談担当と特別支援教育コーディネーターに対して下記の演題で講義を行った。

演題 = LD(書字困難)の行動特性と支援の方法 =



【まとめの講座】

研究実践の成果

- ・学校・保護者・医師3者連携支援の成果により、教育委員会と医師会が連携した支援組織ができた。
- ・市として発達障害児童・生徒を学級に包み込むユニバーサル教育を推進する場合の実践事例となった。
- ・学校現場が求めているLD(書き困難)を表す児童に対して指導スキルが提供できた。